二人で150歳 親子書道展

洞爺湖・佐藤さん＋伊達・岸さん

展覧会場で母・佐藤さんの作品を前に、自身の作品を手にする岸さん

グループホーム入所中に書き上げた作品を手にする佐藤さん＝2008年9月（岸さん提供）

【洞爺湖】町内栄町で書道教室を経営していた佐藤シズエさん（88）と、伊達市在住の次女で室蘭書道連盟理事の岸さちこさん（62）が、町役場ロビーで書道の「親子展―二人で150歳―」を開いている。2度の有珠山噴火を乗り越え、闘病生活の中でも書き続けた佐藤さんと、母を支えた岸さんの作品が寄り添うように並んでいる。（五十嵐俊介）

噴火乗り越え 闘病生活

「米寿の母との約束」

「米寿を迎えたら親子展を開こうねって、約束していたんです」。岸さんは満足そうに作品を見渡した。岸さんは、展覧会名に付けた150歳は、2人の年齢を足したものだ。

佐藤さんの展示作品は02～04年に書いたものが中心。最新作「人のいのち」は縦35センチ、横1メートル36センチの紙いっぱいに力強い字体で書いた力作だ。04年夏に一時帰宅。時折転倒するほど足腰も弱っていたが、納得できるまで書き続け、書道を終えるころには血尿が出るほど体に負担をかけて書き上げた。

「100歳まで生きる」と常々話していた佐藤さん。母親の姿に「書道や生への執念をあらためて感じさせられた」と岸さんは振り返る。

元小学校教諭だった佐藤さんは、1971年に退職し書道塾を開いた。77年と2000年の有珠山噴火で自宅兼書道教室が被災。しかし塾をやめることはなかった。00年噴火の時は70歳を過ぎて足腰も弱っていたが、その後も2年ほど教室を続けた。ひざを痛めた03年に洞爺協会病院に入院。認知症の症状も出始め、06年に伊達市内のグループホームに移った。現在は肺炎などを患って再び同病院に入院している。

岸さんは子どものころ、書道に関心はなかったが、30歳半ばから本格的に習い始めた。佐藤さんの教室に通っていた元室蘭市長の長谷川遅牛さんの指導も受け、今では全国展で表彰を受けるほどの実力だ。

入院中の佐藤さんに展覧会を見せてあげることはできない。しかし岸さんは「人生の大半を書道に費やしてきた母は、教え子のいるこの町での開催をきっと喜んでいるはず」と信じている。「元気になって退院したら、また書道をしてほしい」。尊敬する母と親子展を再び開くことが、岸さんの願いだ。

こころの詩